

2019年8月11日（日）「救いのしるし」

マタイ 25:31-46

31 人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。32 そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、33 羊を自分の右に、山羊を左に置きます。34 そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。35 あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、36 わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』37 すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渴いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。38 いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。39 また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』40 すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』

41 それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ。42 おまえたちは、わたしが空腹であったとき、食べる物をくれず、渴いていたときにも飲ませず、43 わたしが旅人であったときにも泊まらせず、裸であったときにも着る物をくれず、病気のときや牢にいたときにもたずねてくれなかった。』44 そのとき、彼らも答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹であり、渇き、旅をし、裸であり、病気をし、牢におられるのを見て、お世話をしなかったのでしょうか。』45 すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、おまえたちに告げます。おまえたちが、この最も小さい者たちのひとりにしなかったのは、わたしにできなかったのです。』46 こうして、この人たちは永遠の刑罰に入り、正しい人たちは永遠のいのちに入るのです。」

【序論】

ロシアの作家トルストイ原作の『靴屋のマルチン』という絵本があります（元々のタイトルは『愛のあるところに神もある』）。子どもの頃に教会でスライドを見たのですが、

不思議なもので、今でもそのセリフまで鮮明にこの記憶に焼き付いています。初めにあたり、この作品をご紹介します。

元々家族想いで働き者だった靴屋のマルチンは、妻と子どもを亡くし、すっかり人が変わってしまいました。昼間から酒を呑み、部下にもつらくあたる毎日。そんなある日、以前マルチンに皮の聖書カバーを直してもらった牧師が工房を訪ねます。牧師はマルチンの現状をやさしく指摘し、聖書を読んで祈ることを勧めます。その夜、久しぶりに聖書を開いて祈ったマルチンは、不思議な夢を見ました。神様が明日、マルチンの家の前の通りに来られるということです。目を覚ましたマルチンは、それらしきお方が本当に来るのかどうか、気にしながら過ごしていました。朝早く家の前に現れたのは、雪かきをして動けなくなったステパノじいさん。マルチンはおじいさんを家に招き入れ、温かい飲み物でもてなしました。次に現れたのは、赤ちゃんを抱いた貧しい婦人です。あまり子どもが泣くので、マルチンは彼女も家に招き入れ、何日も食べていないためお乳の出ない彼女にスープを飲ませ、赤ちゃんにはミルクを与え、毛布とお金を持たせて見送りました。その次に現れたのは、おばあさんのりんごを盗んだ少年です。この少年もまた、貧しさのあまり食べ物を求めて盗みをはたらいたのですが、その現場で捕まってしまったのです。見兼ねたマルチンは、おばあさんのりんごを全部買い取り、少年に持たせてやりました。このようにして一日が終わったのですが、マルチンは昨夜の夢で神様が現れるという声を聞いたのは、幻に過ぎなかったのだと思って床につきます。ところが、その夜、昼間に会った人々（ステパノじいさん、貧しい親子、りんごを盗んだ少年とおばあさん）が夢に現れ、一人一人「あれは私だったんだよ」「僕だったんだよ」と言うではありませんか。そして、最後に神様は「あなたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのである」と言われました。

この物語は今日のマタイ 25:31 以下の記事を基につくられました。私たちが接するすべての隣人（小さき者）とは主イエスご自身であるという教えがよく表されています。子どもでも、愛の業を行なうことの重要性が十分に理解できるでしょう。しかしながら、私は子ども時代にこの物語にふれ、マタイ 25 章に照らしてみたときに、心に不安を抱いたのを覚えています。それは、この箇所の後半で、愛の業を行なわなかった者に対する審きの宣告が置かれているからです。今日の箇所は、愛の業を行なったか否かによって人間の永遠の行き先が決定されるということが言われているように見えます。しかし、パウロの神学によれば、救いは信仰によって与えられるものであるはず。では、ここで主イエスが語っていることは何を意味するのか。その真の意味を求めながら、私はずっと歩んできました。

【本論】

今日の記事もまた、24 章からの文脈で捉える必要があるでしょう。文脈から切り離して読んでしまうと、その意味が分からなくなってしまうかも知れません。この寓話あるいは直喩（譬話と言うよりも）は、「主イエスの再臨に備えよ」というテーマの上に置かれています。その日に備え、信者は目を醒ましていなくてはならない。そして、実際に再臨の日が訪れた時に、どのような基準で審きが行なわれるのかが教えられているのです。では、まずは本文そのものを読み解いてまいりましょう。

本論 1. 知らずに行なった愛の業

人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、羊を自分の右に、山羊を左に置きます。(25:31-33)

「人の子」すなわち主イエスが再臨される時、全世界／全歴史的審判が行なわれます。この審きを免れる者は一人としていない。各々がその人生をどう歩んだかが問われることとなります。「羊と山羊」という、よく似た動物が挙げられていますが、いずれも「ウシ科」に属し、食の傾向もほぼ同じです。ただ、聖書では羊に対しては良いイメージが置かれ、山羊には悪いイメージが置かれることが多い。その理由として、シリア山羊は色が黒く、羊は白かったことが考えられます。両者は、昼間は一緒に放牧されていますが、夜になると、山羊は寒さに弱いため、それぞれに適した環境のところに分けられたそうです。また、外見は似ているけれど、山羊の方が気性が荒いことも周知の事実。羊は弱く迷いやすい神の民を象徴し（詩篇 23 篇等）、山羊は権力者の象徴として描かれることもあります（ダニエル 8:5-7）。いずれにせよ、終わりの日の審判において、主イエスご自身が神の民と失われた民とを区別なさいます。それまで一緒くたになっていたものが決定的に分けられる（毒麦の譬、地引網の譬に共通したテーマ）。

そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』（25:34-36）

ここで問題となるのが「区別の基準」です。「王」すなわち主イエスは、神の民を「祝福された人たち」と呼び、彼らが永遠の昔から御国を継承する特権にあずかっていたことを告げ給います。そこで、彼らが地上において行なった一つ一つの「愛の業」を挙げていかれる。ここには6つの「愛の業」が列挙されています。衣食住、そして友情という、人間にとって最も基本的な必要を満たしたということが評価される。偉大な奇跡を行なったのだ、悪霊を追い出したのだ、目を見張る業ではありません。小さな日常の必要のことが言われています。第一世紀のキリスト者は実際に厳しい迫害や困窮を経験しましたから、まさに水一杯飲ませてもらえるだけでも感謝に堪えないことでした。ところが、そのような「愛の業」を感謝された神の民たちは、自分たちにはそのようなことを主に対して行なったという意識がまったくないため、面食らってしまいます。

すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渇いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』(25:37-39)

むしろ、これと逆のことはよくあるでしょう。自分がある人に対して行なった罪がずっと胸に引っかかっており、何年も経って謝ったところ、「そんなことあったっけ？」と逆に聞かれてしまうことがある。反対に、自分にはあまり心当たりのないことでありながら、誰かに恨まれていて、「あの時は本当に傷ついたよ」「あれには腹が立った」などと言われて愕然とすることもあります。この最後の審判の場面で主イエスからお褒めにあずかることほど幸いなことはないでしょう。しかし、自分にはその記憶がないのです。それはどうしてなのか。

本論 2. 最も小さい者

すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』(25:40)

彼らが主に対して行なったことというのは、実は隣人に対して行なったことであったということです。では、「わたしの兄弟」「最も小さい者たちのひとり」とは、具体的に誰を指すのか。大きく二つの解釈があります。第一に、主イエスを信じる弟子たちのことを指すと考える人がいます。迫害の只中、あるいはギリギリの生活の中で伝道をしているキリスト者にやさしい言葉をかけ、その小さな必要を満たしてくれたことが、主イエスご

自身への愛の業と捉えられる。この解釈には確かに、教会とキリストの一体性という新約聖書の原理が現れているでしょう。

- ・ 天におられるわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。(マタイ 12:50)
- ・ 彼が、「主よ。あなたはどなたですか」と言うと、お答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」(使徒 9:5)
- ・ 教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。(エペソ 1:22-23)

また、これまでマタイ福音書の中で「この小さい者たち」という表現が出てきたときに、つまずきやすく弱い主の弟子を表していたということも、第一の解釈を強化します。

- ・ しかし、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにでもつまずきを与えるような者は、大きい石臼を首にかけられて、湖の深みでおぼれ死んだほうがましです。(18:6)
- ・ あなたがたは、この小さい者たちを、ひとりでも見下げたりしないように気をつけなさい。まことに、あなたがたに告げます。彼らの天の御使いたちは、天におられるわたしの父の御顔をいつも見ているからです。(18:10)
- ・ このように、この小さい者たちのひとりが減びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではありません。(18:14)

そして、今日の箇所と最も関連の深い内容は次の箇所に出てきていました。

- ・ わたしの弟子だというので、この小さい者たちのひとりに、水一杯でも飲ませるなら、まことに、あなたがたに告げます。その人は決して報いに漏れることはありません。(10:42)

マタイ福音書全体の文脈で読むならば、主イエスはご自分の弟子たちへの愛の業のことを言っていると考えて間違いではないでしょう。

しかし、第二の解釈として、もっと広い意味において、信仰をもたない人々、他宗教の信者をも含む「あらゆる隣人」のことを言っていると捉えられる可能性もあります。『靴屋のマルチン』が物語の中で行なっていることとは、決して相手がクリスチャンだったからという基準ではないでしょう。彼はたまたま出会った「必要のある人々」に手を差し伸べたのです。「良きサマリア人の譬」(ルカ 10:30-37)を思い起こしてみるならば、あのサマリア人は敵対関係にあるユダヤ人の一人が苦しむ姿を見て、放っておくことはできませんでした。全人類が神によって造られたのであれば、私たちにとってすべての人が「隣人」だということになる。病気で苦しむ人、明日食べるものもない人に仕えることは、神の求め給うことであるはずです。ゆえに、私自身は第一も第二も両方の解釈が適用されてくると信じます。

本論 3. 知らずに行なわなかった愛の業

さて、いよいよ今日の箇所最大の問題に取り組んでまいります。救いの基準とは何かという問題です。

それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ。おまえたちは、わたしが空腹であったとき、食べる物をくれず、渴いていたときにも飲ませず、わたしが旅人であったときにも泊まらせず、裸であったときにも着る物をくれず、病気のときや牢にいたときにもたずねてくれなかった。』そのとき、彼らも答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹であり、渇き、旅をし、裸であり、病気をし、牢におられるのを見て、お世話をしなかったのでしょうか。』すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、おまえたちに告げます。おまえたちが、この最も小さい者たちのひとりにしなかったのは、わたしにしなかったのです。』こうして、この人たちは永遠の刑罰に入り、正しい人たちは永遠のいのちに入るのです。」(25:41-46)

ここでは、失われた民に対する宣告がなされています。その時に主イエスが言われる言葉もまた、ご自分に対する「愛の業」が基準となっていることに驚かされる。彼らもまた、自分ではまったく認識のないところで「愛の業」を行なっていないのです。そして、それを行なわなかったから地獄に墜ちると言われる。

さて、私たち読者は一度、すべての先入観を捨ててこの箇所を読んでみる必要があると思うのです。この箇所全体を読んで、一体誰が平安でいられるでしょうか。自分は地上で十分な愛の業を行なったと言い得る人が一人でもいるでしょうか。確かに、奴隷解放運動を行なった立派な政治家がいます。貧困をなくすために今も労苦している人がいます。環境問題を改善するために日夜研究している人々もいます。刑務所から出て来られた方や、ホームレスの人々を支援するような状況もあります。しかし、それらすべてのことを行なったとしても、神が求める義には到達できないのです。私が一生かけて世界のために愛の業を行なったとしても、神の目には不十分であり、私は「行なわなかった愛の業」が問われることになるでしょう。私が子どもの頃に『靴屋のマルチン』を見て感じた不安の根本的な理由はここにあったと思うのです。

では、聖書は人が義とされるためには何が必要だと語っているか。もう一度その原点に戻らなくてはなりません。パウロはこう言っています。

しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。すべての人は、罪を犯したので、神から

の栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現すためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。それは、今の時にご自身の義を現すためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。それでは、私たちの誇りはどこにあるのでしょうか。それはすでに取り除かれました。どういう原理によってでしょうか。行いの原理によってでしょうか。そうではなく、信仰の原理によってです。人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。

(ローマ3:21-28)

今日の箇所は一見「行ないによる義」を説いているように見受けられます。しかし、注意深く読むならば、そうではないことが分かります。と言いますのは、救われた民ですら自分が行なった愛の業には何一つ気づいていないからです。彼らの内には真のへりくだりがあります。自分が神の御前で何者でもないことを知っているのです。自分には神の基準に達するような義がないことを誰よりもよく知っている。では、彼らが「行なった」とされる「愛の業」とは、一体いつどこで誰によって行なわれたのか。私はこう考えます。それは主イエスご自身が十字架上で全うされたのだと。私たちが本来行ない得なかったすべての愛の業、神の義の基準を満たしてくださったのは主イエスだったのだと。私たちが主イエスを信じている、そのことによって私たちは「すべての愛を全うした者」と見なされるのです。

【結論】

しかしながら、そのように無償で義を与えられた私たちには、そこから求められていく新しい生き方が確かにあります。それは、主イエスがこの世を愛されたと同じように、私たちも世を愛するということです。その愛の対象は実に広い。最も身近な家族、職場や学校で接する人々、教会でふれ合う仲間たち、たまたま出会った「必要のある」人々、そして世界全体の「痛み」を覚える人々です。愛を必要としているところは無限に存在する。私たちには満たし切ることはできないでしょう。しかし、それだからといって目を瞑ってよいということではありません。キリストの愛はキリスト者を通して世に現れていくからです。そして、私たちは自分が誰かを愛するときに、自分の霊が目醒めていることを知ることになるでしょう。愛の業は「救いの条件」ではなく、「救いのしるし」です。誰かを愛するとき、私たちの霊の目は研ぎ澄まされていくのです。

【祈り】

義の基準、愛の基準であられる、イエス・キリストの父なる神様。人が義とされるのは、ただ主イエスの義のゆえであります。その義によって、主イエスが行なわれた完全なる愛が、自分自身のものとされるのです。このようにして、愛の基準を満たした私たちは、現実「愛する者」へと変えられていくことを切に願います。私たちの生来の状態では、それはなし得ません。愛なる神よ、私たちの人格に宿り、私たちをも愛の人として造り変えてください。

【祝宣】

仰ぎ願わくは、

愛の基準、義の基準として、ご自身を世に現し給う、父なる神の愛。

十字架において一切の神の基準を満たし、信じる者に義の衣を纏わせ給う、主イエス・キリストの恵み。

信者・未信者を問わず、すべての隣人を愛させ、救いの確信を増し加え給う、聖霊の親しき交わりが、

我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。